

京鹿子

昭和二十五年五月一日発行
第三十三号(毎月一日発行)



5月号



鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その二十

椿 落 つ 天 の 知 ら ざ る も の の な し

偶 さ か に 一 会 の 雨 の 椿 寺

学 舎 の 蒼 き 乾 き や 春 の 泥

三 門 の 花 の き ざ は し 男 坂

古 楠 や 慈 眼 の こ ぼ る 寺 の 春

扁 額 の 大 華 頂 山 花 の 寺



大任の花の言祝ぎ宴の首座
堂おぼろ揣摩憶測の水面下
筒鳥や花押に似せる謀
気後れの虻の一群瑞泉寺
子羊よ卯月曇りの丸の内
初夏の愁ひ切り口見つからぬ
蜘蛛の囿やただ今瓦斯の検針中
誤配とな管轄外の落し文

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

武家なごり

椿 咲 く 重 き 門 武 家 な ご り

落 椿 ひ と つ ば な し の 藪 の 中

春 の 泥 宅 急 便 の 走 り ぐ せ

— 追 懐 — (その三十)

潮まねき女身は軽ぐ自砂踏む
〔平成十二年作〕

遅ざくら牛歩の如く雲流す
〔平成十二年作〕



—
近 詠
—

和田 照海

貝寄風

海光の手許まぶしく雛飾る

雛町の提灯一つひとつに灯

貝寄風や妹背の島の端正に

海苔採りの島より低くもぐり舟

ジーンズの歩々に紋白蝶生る



英華採集

この家は老人がゐる咳の聲

大 阪 山 崎 隆 司

尾崎放哉に「咳をしても一人」の句がある。独り住まいのうら寂しさを醸し出しているが、言外に人間の孤独を詠んでいる。掲句には重ねてきた齢に愕然としている自分を客観的に凝視している作者がいる。「老人がゐる」という響きには、それを受け入れようとする作者の遣る瀬無い肯定感が強く滲んでいるのではないだろうか。

碁盤目の初手は御所かや旅うらら

大 津 秋 山 隆 一

碁盤と初手から囲碁の対局場面と思いきや、見事に裏をかかれた。京都市内は、碁盤の目と言われている。多くの観光客が京都に来て先ず最初に訪れるのは、御所であるのかも知れない。昨今の外国人観光客にも当てはまるであろう。下五に「旅うらら」と結句を置いたところが良い。

初虹や省略するは形容詞

京 都 多 田 光 子

初虹とは、春になって初めての虹のことで淡く消えやすいが趣は深いものがある。我々は虹を見て「美しい」「きれい」という形容をもって感嘆するが、感銘の歎声というものは胸の内深く己の心にとどめるものであろう。これは、俳句にも通じるもので言葉を省略することは俳句の原点である。形容詞を省略するという措辞と季語の響きは、取合せの妙として面白い。

松本 鷹根



塩貝 朱千

春 探 る

大寒を輪に描き鳶は上昇す

谿こだま辛夷は雨後の芽を掲ぐ

ほどほどに海を葉に座禅草

葉に包む含み笑ひや桜餅

春探る鳶を見下ろす稲荷山

近 詠

フ
ラ
ン
ス
パ
ン

佐保姫へ渚の鳥のピアノシモ

もう一人の私と春と鏡の部屋

春しぐれフランスパンをさくつと割る

風花や鳥影黒きミステリー

消えてゆく春虹離さぬあふみの海



神麓集

流し雛 藤岡紫水

梅二月彩なき花に香の気品
一雨得てたちまち春の立つ気配
手に掬ぶ水のやさしさ春めける
一串の目刺がこぼす海のいろ
小流れの底に影曳き流し雛

薫風 沼田巴字

みほとけのまなじり細し夏はじめ
山葵田や水車の音を遠くして
花水木坐禅ふさはしその根元
薫風の野に聖賢の書をひらく
濃山吹刻を惜めばひるがへり

朧夜 丸井巴水

戀遂げし猫も深手の耳の欠け
火袋に魂の灯りし朧の夜
争はぬ構へ身につけ暖かし
一刀の反りあり川の青柳
朧夜のガス燈ぼつり戀が浮く

深雪 植村蘇星

産科とは知らずとび込む春しぐれ
老いの手を負へぬ勢ひいぬふぐり
名は心然れどお茶目のいぬふぐり
千枚田一枚と化す深雪かな
寒村にうたた無情の深雪かな

歩道橋 北川孝子

春しぐれ口笛の行く歩道橋
語るには程よき小道冬ざるる
京水菜ほろほると煮ゆ夜の静寂
人恋へばおもかげのゆれ春雲
春しぐれ余生まだまだ捨て難し

うすらひ 直江裕子

空青く鶴の死を誰も知らない
うすらひのひそひそ溶ける妬心かな
どこも雪それでも土は眠らない
今年で最後いくど口にしたことか
てのひらの生きしる檸檬滴たらす



神麓集

お か め 高 木 晶 子

軒の内見ることもしなす大氷柱
厄落しおかめで戻る男坂
散るものは散れと節分寺の鐘
大達磨片目に雫節分会
結び目の解けずにて木の芽晴

春 近 し 伊 藤 希 眸

結論は小箱に雪の街へ出る
薄氷を渡りて辛寿辞書をひく
春雪やこつりと動く二時の針
冬安居きつねの嫁入り来て修す
腕折れむか「考へる人」に春近し

語 尾 木 戸 渥 子

年あらた起承転結にて暮らそ
はや三日管巻く叔父を裏返す
息ましろ語尾とんがつてゐる私
餅ふくる余生のことばさておいて
折角のお誘ひですが花粉症

ふ あ ん 奥 田 筆 子

わたくしはわたしのふあん雪が降る
時計草渦の二つは膝小僧
豹変の夜ありにけり恋の猫
ひねり姫ひねり王子も初句会
葉牡丹の背伸びしてゐるロングドレス

冬 日 ひと つ 井 上 菜 摘 子

結末は切株にさす冬日ひとつ
失せ物はわれかもしれぬ初みくじ
読初のヒロインとの仲ぎくしやくす
吹雪く夜のハザードランプ児を寝かす
シヨートシヨートに猫は割愛まめの花

梅 見 村 田 あ を 衣

身の証立てやうもなく蝶凍つる
底冷への影をしたがへ百度跡む
初夢や紙飛行機は月面へ
火も水も夫に預けて女正月
昼月の透くや梅見のさそひ状



希望

鈴木呂仁

残 桜や己が一分の意地通す
心 ぐし残花の浜の虚貝
瘡 蓋の取れて晩春蒼き点
傷 口は付箋で足りる春の暮
春 陰や付箋の色を替へてみる
残 花なほ我が衣手に纏ひたる
発 心は名残りの花と思ふべし





余花白し躑く石の二つ三つ
幾許の余花明りして向後の途
花は葉にさ揺れるほどの風つかむ
花は葉に一意の風の神慮かな
初夏の初心に戻す志
吉方の千本鳥居夏めける
小満の手の平に受く軍星
心垢消ゆ片支へなき二重虹
神山へ啼く老鶯の胸一分





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

この家は老人がゐる咳の聲

大 阪 山 崎 隆 司

淡路とは阿波への路か水仙花

豆打つや考のメモには福は外

大試験あとにも先にも父助言

豆撒くや大鬼小鬼大世帯

郷關を出でし朝や春の雪

初霞友は比叡へ登りゆく
三が日妻の賄ひ朝忙し

アリスナ 伊吹 之博

碁盤目の初手は御所かや旅つらら

大 津 秋 山 隆 一

春の雲ガラスの棧にひつかかり

喫茶店空気引縮む受験生
梅の香を肺腑に満たし再渡米

糠漬をわが手の探る余寒かな

庭歩くカサコソ聞ゆ冬の声

オハイオ 水谷 直子

梅の花こも揃ひの青柄杓

枯葉散るウスムラサキの空は澄み

初虹や省略するは形容詞

京 都 多 田 光 子

節分会蕎麦屋に残る歴史あり

夕風やひらり一枚又一枚
サツと風枯葉舞ひ散る窓の中

雪国は好きだつた筈雪しまき

札 幌 野村 鞆枝

雪の朝親子づれらしけもの道

紙風船子を抱くやうに吹き上げる
たんぼぼや慎み深き喜寿のふみ

雪晴れや空に溶けこむ遠き嶺

大年のありがとうで閉づ日記

ヴェランダに鳥の足跡雪の朝

はつ春の菓子の空き箱マトリョーシカ

雪積るチーズと納豆パンに載せ

酒 田 藤波 松山

絶え間なく降る雪の下ただ生る

寒暁や駅の灯りに街動く
快速の通過の灯り寒さかな

寒鱈のまつり仕度に雨襲ふ

風花や日差しの延びる巡礼道

松 戸 岡山 敦子

鱈まつり太鼓の音も味のうち

春一番駕籠には乗らず金毘羅宮

年男期待をされて社会出づ

浪 川 東 秋茄子

福豆を主なき部屋まき散らす

雪解水石鍾山麓香り立つ

北口で立春の気配待ち望む

梅の風玻璃を通しぬ茶を点てる

習 志 野 上野 紫泉

寂しき庭黄水仙見つけそつとふれ

二ん月の荒海に立つ姥の素手

孫去んで妻と二人や聖樹消す

さいたま 神田 惣介

着膨れの三つ子小走り母を追ふ

海鳴りや虚空へ萎ゆる水仙花

マス・メディア断つて古典を寒の入

強東風やかもめの群の錯綜す

船 橋 元橋 孝之

京離れ半世紀なるも京雑煮

いくつから長寿と称す初鏡

立春の俄に壊るスマホかな

戸 田 遠山 悟史

散歩道足の裏より冴返る

年酒くみ尽きぬ家系の物語

神々の恋の季節や建国日

菩提寺の初護摩庵修石に沁む

金子 正道

白梅や父の形見の大島紬

父真似し小さき胡坐初写真

今日といふ未知春暁の常夜燈

千 葉 高野 春子

針供養動き出したるオリオン座

駅蕎麦の匂ひ乗りくる初電車
タワ一より関八州の初景色
初天神絵馬に大きく母校の名